

自分の十字架を負って キリストに従う

マルコによる福音書8章31～38節

2023年2月5日
松田 基子 師

神様は、ご自身の御心を分かろうとしない私達人間を、見放される事なく、見放すどころか、神様に叛いて(そむいて)滅びに向かっている人類に、神様の御心を示して、人類を永遠の滅びから救おうと、神の御子を人の世に、人の子としてお遣わしになりました。それがイエス様です。イエス様は、神様の御心を伝える使命に立って、マルコによる福音書1章15節で、

「時は満ち、神の国は近づいた。

悔い改めて福音を信じなさい」

と言って、神の国の福音を宣べ伝え始められました。

神の国とは何でしょうか。神の国とは、『神様の御支配の許(もと)に、神様に聴き従って生きる事です。』一方、当時のイスラエル社会は、『自分達は神様に選ばれ、神様の御支配の下に、律法を守って生きている』と自負していました。しかし、その実体は、宗教家達を始め多くの人々は、表面的には信仰者らしく繕いながら、実生活は、『人間中心の考え方、生き方をして、自分達のために、神様を利用していた』に過ぎませんでした。

イエス様はその欺瞞に対して、宗教家達と対立される事は必然のことでありました。イエス様は弟子達をお選びになり、宗教家達から締め出された人々に、神様の愛を語り、見放された病人を癒し、嵐を鎮め、又、イエス様の教えに聴き入り、時を忘れ、空腹になった、五千人以上の人々のために、パンの奇跡を起こして養われました。そのようなイエス様に対して、民衆の称賛と救い主メシアへの期待は、日に日に高まっていきました。

そのような時、イエス様は弟子たちを連れて、ガリラヤ湖を離れ、北へ50kmほどのイスラエルの北限に位置する、フィリポ・カイサリアに向って、

歩みを進められました。その道中での事です。8章27節で、

「人々は、わたしのことを
何者だと言っているか」

とお尋ねになりました。イエス様の、この質問は、決して、人間的な評価を求めて尋ねられたものではありません。イエス様は重大な覚悟をなさっていました。それは、弟子たちにも、関係する事でした。そのために、弟子たちが正しい認識を持っているかを知らうとなさっての質問でした。弟子たちは単純に、自分達がこれまで耳にしてきた言葉を、イエス様に告げました。

28節を見ますと、

「洗礼者ヨハネだ」「エリアだ」「預言者の一人だ」

と偉大な人々の名前が挙がりました。洗礼者ヨハネは、領主ヘロデ・アンティパスに、彼の罪を糾弾したため、殺されてしまいました。しかし、アンティパス自身、イエス様の力に怯(おび)えて、

「洗礼者ヨハネが死者の中から
生き返ったのだ」

と言い、周りの人々も、多くはその様な考えでした。エリアは、古代の大預言者ですが、生きたまま、天に上げられたところから、

「メシアが来られる前に、天から
降って来て、メシアの道備えをする」

と信じられていました。イエス様の本意は人々の噂や、評価ではありません。

イエス様は29節で、

「それでは、あなたがたはわたしを
何者だと言うのか」

とお尋ねになりました。

するとペトロは、待っていましたとばかりに、
「あなたは、メシアです」

つまり、救い主ですと告白しました。イエス様は正しく、神様が遣わされた真の救い主・メシアでした。ところがイエス様は、30節で、

「御自分のことをだれにも話さないように」

と、弟子たちを戒められたのです。何故イエス様はご自身がメシアであることを、弟子たちが言い広める事を禁じられたのでしょうか。

『メシアと言う言葉は、当時のイスラエルにおいては、ダビデの再来を求めた、王朝の復興を願う政治的意味あいを持った言葉』

でした。 その様な間違ったメシア理解を持っている民衆に対して、弟子たちが、イエス様を、メシアだと言ひ広めたなら、大変な事になるでしょう。 ですからイエス様は、弟子たちに、

「ご自身の事をメシアだと
言っては成らない」
と戒められたのでした。

ところで、イエス様に対するメシア理解の間違ひは、民衆ばかりではありませんでした。 ペトロを始め、弟子たち皆が、イエス様の真のメシア像を分かってはいませんでした。 その事が31節からのイエス様と、ペトロの間答で明らかになりました。 31節に、

「それからイエスは、
『人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、
祭司长、律法学者から排斥されて殺され、
3日の後に復活することになっている』
と弟子たちに教え始められた。 しかも、
それをはっきりとお話になった」
と記されています。

イエス様は、ご自身がメシア・救い主である事を自覚なさっていましたが、メシアと言う言葉が、政治的な意味合いを持っていたことから、ダニエル書7章13～14節に記されている、神様から、権威、威光、王権を受けた永遠の統治者としての呼称である「人の子」と言う呼び方で、ご自身を現されました。 弟子たちもイエス様をご自身を「人の子」で表現されることを理解しました。 ところがイエス様は弟子たちの期待に反して、

「苦しみを受ける」
それも、
「国の指導者層から、排斥される」
と言われ、イエス様はその事を冗談ではなく、真剣に言われましたので、ペトロを始め、弟子たちは驚いてしまいました。

ペトロは弟子の筆頭としての意識を持っていましたから、

『ここは、自分がイエス様を
諫め(いさめ)なければならない』
『そんなことが民衆に伝わっては
成らない』

と思ったようです。 32節には、
「ペトロはイエスをわきにお連れして、

諫め始めた」

と記されています。 ペトロは、
『イエス様、そんな事を言うてはいけません。
民衆は皆、イエス様をメシアだと期待している
のです。 それなのに、指導者達から排斥され、
殺されて、3日目に復活するなんて』
そんなのはメシアではありません。

『イエス様、あなた様はメシアなのですから、
強い姿を見せて下さい』
と、そんな思いで、イエス様を諫めたのでしよう。

するとイエス様は、33節で、
「振り返って、弟子たちを見ながら、
ペトロを叱って言われた。

『サタン、引き下がれ。 あなたは神の
ことを思わず、人間のことを思っている』
と言われました。 詳訳聖書では、その様子がより詳しく記されています。

「イエスは、振り返って、ペテロに背を向け、
弟子たちを見、ペテロを非難して言われた。
『サタンよ、わたしの後に退け。 お前は神の
御旨を押しすすめるのに熱心でなく、人間を
喜ばせる事に熱心なのだ。 お前は神の側
ではなく、人間の側に着いている』
と訳されています。

ペトロはイエス様を愛し、慕っていました。
『イエス様の内には、神様の御力が
注がれ、宿っている』
事をその目で見て、実感していました。
『イエス様の聖さや愛は、神の人である
ことを証明していました。』
『イエス様は多くの奇跡を行われ、
力に満ちておられる。 そのお方が、
殺される筈がない。』
『メシアとはこの世の如何なるものにも
負ける事が無いお方なのだ。 そんな事
がある筈がない。 何処までも強いイエス
様であつて欲しい。』
それがペトロの願いでした。

ペトロとて、宗教指導者達の生き方が、
『神様に従った生き方ではない。 イエス
様の生き方こそが、神様の御心を示して
おられる』
ことは良く分かっていました。 しかし、
ペトロにとって、イエス様は強くなければ
困るのです。

国の指導者達に、殺される様なことがあつては成らないのです。そんな事になれば、弟子の自分達にも、危害は及ぶでしょう。誰も、我が身が一番可愛いのです。神様に従うのは、苦しみたくない、幸せになりたいからです。もちろん、神様御自身、全ての人が、真の意味で幸せになる事を、願っておられます。

しかし、人の幸せは、自己中心、自分本位です。結局ペトロだけでなく、弟子たちは皆、イエス様に従って来たのは、究極のところ、**自分の幸せを求めて来た**のです。人間が求める幸せとは何でしょうか。

『自己中心、自我を喜ばせる』こと、
『富や名誉や、地位や、称賛』です。
それは**神様を退け、神様に敵対する、サタンに支配された生き方**です。イエス様はペトロの心の底にある、その思いをご存知で、彼がサタンに聴き従っている事から、ペトロへ反対の意思表示として、背を向け、

『サタンよ。私の後に退け』
と命じて、

『お前は神の側でなく、
人間の側に付いている』
と、はっきり言われました。

人は誰も、**神様の側に付くためには、イエス様の後に従う事**です。これ以外に神様の側に付く方法はありません。イエス様の願いは、弟子ばかりでなく、皆がイエス様の後に退き、従う事です。そこでイエス様は弟子たちばかりでなく、群衆も呼び寄せて、34節に、

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、
自分の十字架を背負って、わたしに
従いなさい」
と招かれました。

詳訳聖書には、
「誰でも、私について来ようと思うならば、その人は自分を否定し、自分と、自分の利益を忘れ、顧みず、否認し、それに目もくれず、自分の十字架を取り上げて、私の弟子になり、私の仲間に加わって、私に従って来なさい。」

すなわち、

『絶えず私に堅く依り縋りなさい』

と訳されています。ここが**キリスト信仰が世の如何なる信仰とも違う所**です。

人は何故信仰を持つのでしょうか。それは自分の安逸、幸せを求め、一生を楽に、楽しく、苦しむ事無く、過ごしたいとする、自己中心、自己を満足させてくれる生活を送りたいからです。しかし、その自己中心こそが、

『自分さえ良ければ』

と、他者を踏み台にして、自分の幸せを求めるのです。世の多くの宗教は**その為の信仰**です。神様が、その様な事を願われる筈がありません。人間は皆、自分が傷付く事を恐れます。自分が犠牲になることを恐れます。**生来の人間に、自己を否定する力、ましてや十字架を負う力はありません。**

では、イエス様は何故その様な無理な要求をなさったのでしょうか。35節に、

「**自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである**」

との、答をお与えになりました。人は誰も、自分の命を救いたいと願っています。イエス様はここで、そう言う弟子たち、群衆、私達に、

「**自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである**」

と仰っておられます。

この、「**それ**」とは、一体何でしょうか。イエス様はここで明らかに、

「**それ**」という、

『**肉体の命に勝るものがある**』

事を示しておられます。「**それ**」とは、神様が掛け替えのない存在として、お与え下さった、

『**わたしと言う存在**』

です。神様は霊なるお方です。神様に似せて造られた人間は、霊的存在に創られ、神様に応答出来る者として、時間と空間の世界に肉体の命を与えられて、世に送り出された者です。時間とは、限りあるものですから、人もこの地上の命には限りがあり、必ず地上の命の終わりがきます。しかし、人間の存在は、そこで消えてなくなるではありません。

神様の前に出て、地上の命を、

× 『人間の側に付いた』のか、

○ 『神様の側に付いた生き方を選んだ』
のかが問われ、神様の側に付く生き方を
全うした者に、「**それ**」、すなわち神様の側に
永遠にいる事が出来る、永遠の命が与えら
れると言うことです。この地上の時間と空間の
世界は、神様に敵対する勢力であるサタンが、
人間の自己中心性に訴えて、神様に聴き従う
ことを妨害し、

『自己中心に生きることが
人間らしい生き方だ』

と煽り、神様に叛かせることに必死になって
いる世界です。それは、とても巧妙で、人間を
神にさせるのです。

イエス様時代の宗教指導者達は、神様の前
に遡り(へりくだり)、御心を尋ね求めるのではなくて、
自分達の考えを神様の考えにすり替えて、イエ
ス様を憎み、妬(ねた)み、この後、イエス様を十字
架に掛ける為に、全力を尽くすのです。
彼らは、サタンに支配されている事に気付いま
せませんでした。神様の御心は、イエス様によって
現されました。イエス様は、人類を永遠の罪の
滅びから救うために、罪の無い神の御子の身体
に、全人類の罪を負われ、地上の身体を、
十字架に掛けて、その命を捨てて下さいました。
そのイエス様の贖いによって、神様は人類の
罪を赦し、その証明に、イエス様を復活させられ
ました。

イエス様はこのようにして神様の側につく生き
方の実体をお見せになり、復活して永遠の命、
「**それ**」を得る事の保証をお示しになりました。
この時、イエス様はすでに、その世界を知り、
その世界に生きておられ、36節に、

「人は、たとえ全世界を手に入れても、
自分の命を失ったら、何の得があるのか。
自分の命を買い戻すのに、どんな
代価を支払えようか」

と言って、永遠の命の価値をお示しになりました。
私達は、自分の力、努力で、この世の人間の側
の力に打ち勝つことは出来ません。それが私
達の十字架です。それに打ち勝つ為には唯
一つの道、イエス様の後に、唯一途に付いて行
くことです。私の力で、十字架を担ぐのでは

ありません。イエス様が十字架を担いで下さり、
その後の方を担いで、イエス様に従っていくので
す。イエス様は私達の前に進んで
私達が後から、

「重いです。痛いです。苦しいです。
悲しいです。疲れしました。何時まで
ですか」

と言う叫びを聞いて下さいます。そして、

『私が共にいる。』

『御国はもうすぐだ』

と励まし続けてくださいます。

38節に、

「神に背いたこの罪深い時代に、
わたしとわたしの言葉を恥じる者は、
人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる
天使と共に来るときに、その者を恥じる」

と言われました。不信仰なこの時代に、イエス・
キリストを信じ、永遠の命を信じて生きる事は、
この世からは、相手にされず、愚かに思われる
でしょう。しかし怯(ひる)んではなりません。
私たちは再臨の主にお会いする日を夜毎思い
描いて、地上の旅路を歩み抜いて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

私達を、永遠の滅びから救うために、
御子イエス様をこの世にお遣わし下さり、
イエス様は私達の罪を、十字架に掛かって贖い、
救い出して下さいました。その恵みは計り難く、
私達は最早、この世に付く生き方をしてはならな
い者です。しかし、弱い私達は救われた罪人
で、すぐに人間の側に付いてしまいます。

どうか御聖霊が私達をご支配くださり、常に
イエス様の後に依り縋り(すがり)、与えられる十字
架をイエス様に依って負って行く者として下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈り致します。

アーメン。